

長谷川成一著

『日本歴史叢書 63 弘前藩』

山本 隆志

弘前大学長谷川成一教授は、弘前藩政にかんする共同研究を推進し、自らも著書を公表し、さらに青森県史、弘前市史、青森市史などの自治体史編纂にオルガナイザーとして参画し、史料発掘・蒐集の基礎作業を展開している。折り目正しい人柄・学風とあいまって、著者の近世北方史研究は手堅い史実の確定と研究史への的確な発言で多くの人を引き付け、一国史的・内在的歴史展開史観を相対化するものとして、注目されている。

『弘前藩』はそうした著者の研究を集大成したものであり、弘前藩政の開始から終末までを、満遍なく、明晰な文章で、敘述している。私は弘前藩史の専門家ではないし、北方史に詳しいわけでもない。ただ室町・戦国期の東国史、とくに国人領主に興味を持つ者として、北方国境地帯に近世国家体制が展開していく経緯を、さらに弘前藩が展開する藩政とは何か知りたい、と思う。

『弘前藩』の大枠構成は次の通りである（カッコ内は各章の分量）。

はしがき（八頁）

序 津軽氏・弘前藩の自己認識（一一頁）

第一 統一政権と津軽氏——混沌から領主権力の成立へ——（二四頁）

第二 十七世紀前半の藩政展開―藩体制の確立に向けて―（四五頁）

第三 「中興の祖」津輕信政の明暗（四七頁）

第四 内憂と外患の世紀―飢饉と蝦夷地出兵―（四二頁）

第五 生活と生業から見た藩領の人々（三八頁）

第六 藩政の動揺と幕末期民衆（二二頁）

第七 維新変革と藩体制の解体（二五頁）

「はしがき」にて、著者は読者にあらかじめの見取り図を示す。弘前藩政の時期区分を六期にわけること、藩政の特徴として松前・蝦夷地に接することと領内にアイヌを抱えることを指摘するとともに、他のどの藩にもみられるような藩政の展開がある、とのべる。

構成をみると、本文の比重は「第二」・「第三」・「第四」におかれている。そこには弘前藩政の大枠が見えるであろうから、ここからはじめたい。藩政の本格的展開は二代信枚から見えるが、その内容として、城下弘前の建設が領内各地方・近郊農村との交通をひらく形で展開したこと、岩木川を用水利用する新田開発（派立）が藩士・藩直轄地百姓により推進され（半島北部や岩木川下流の湿地帯では藩営）、外浜では中世以来の伝統ある油川でなく新たに青森を開港した、等々を述べる。また初期の御家騒動をへて家臣団統制の進行、地方支配機構の成立などの藩政機構を説明している。四代藩主信政の治世（一七世紀後半・一八世紀初頭）は半世紀余に及ぶが（全国的にも藩政が本格的に展開する）、著者は信政の生まれ・人となりに触れたあと、寛文九年（一六六九）の蝦夷峰起への弘前藩の対応を盛岡藩と比べながら述べるが、その軍事的対応

・情報収集活動が敏速である、領内アイヌを動員している、幕府と連絡を取り合っている、など指摘している。とくに当初の出兵規模は幕府の予定を越えていて、蝦夷と接している松前藩に「責め取る」気かとの疑念を抱かせたという。この対応により、弘前藩は「北狄の押え」とした自己を国家内に位置づけていく。著者はまた信政期の政治として、貞享四年領内総検地の実施形態と役割、都市弘前・青森へ出された法度の特徴を述べている。農村・都市ともに支配体制が確立したとの趣旨である。

信枚・信政の藩政は、岩木川流域の開発（農業だけでなく舟運）や銀銅山（尾太）開発また植林・殖産政策にまでひろがっている。こうしたことは全国的な傾向であろうが、またそれが領主財政を確保することを目的にしていることを事実であるが、それは岩木川の改修などの基盤整備をともなっている。いわば津輕領全体の開発を進める方向にあり、領内宗教勢力にも及ぶと思われる、とても室町期の南部氏領主制では想定できない。この藩政には領主制支配の面とともに公共的側面が見え、明治県政に通じる面があるように思う。このような藩政が信枚・信政の時期に始まったことがよくわかる。

このような藩政はどこに出發するのであろうか。「第一」では津輕領の形成を、天正末年の戦争状態のなかで津輕為信が豊臣政権・徳川政権に臣従し、知行安堵される過程として叙述されているが、その知行安堵の両期としては天正一八年末〜一九年正月（秋田氏とほぼ同時期）、また慶長五年（関ヶ原直後の津輕領石高安堵）と認識している、とみられる。天正末年・慶長五年の知行安堵は後の弘前藩領の出發点になったこ

とは叙述からよく納得できる。ただこの知行安堵から信枚・信政の領内全域（仏神界をも含む）を対象とする藩政との間は、同じ政治権力の延長としてだけ理解していいか、考えてみたいこともある。

藩政後期はどこでも、財政逼迫、藩政改革、飢饉、米価騰貴、一揆・打ちこわしの激化という問題が見えるが、弘前藩では飢饉の深刻さが詳述される。信政治世時代の元禄飢饉にたいする藩の対応にも触れているが（第三）、著者は天明三・四年飢饉の進行過程を要領よく述べている。餓死者を八万人も出した惨劇であるが、災害史に造形深い著者は寒冷状況（世界的寒冷化、東風（ヤマセ）を簡潔に指摘し、食料窮乏・飢餓の様子を、さらに米商人の動き、藩の対応を述べる。藩のしたこと（特殊状況下の藩政）は年貢免除、米穀の移出禁止、窮乏者への飯屋・食事・僅少生活費給付などであり、幕府の後援を得て実施された。災害時における政治の対応は過去の問題ではない。充実した叙述にふれた読者は弘前藩の対応を隣藩また明治以降の事例と比較検討したい気になる。この時期の藩政改革として、著者は宝暦期の乳井貢の政策、寛政期の藩士在方（土着）政策を紹介しながら、いずれも失敗に終わったと指摘する。さらに寛政期以降、ロシアの蝦夷進出にともない、幕府の北方警備が強化され、それを分担する弘前藩の様子を盛岡・八戸両藩とともに述べているが、ここでは弘前藩は幕府とほぼ一体である。幕府からの指示に応じた藩は格を上げたが（二〇万石化）、寒冷の蝦夷地での越冬警備に従事した下級藩士・郷夫の様子が述べられている。興味深いのは、北方警備役が増加するなかで、弘前藩主が黒石藩に加増して大名化したことである。北方警備を支える藩体制を二元的にしようとするものか。

著者は「第五」で津軽の生活史を扱う。ここで注目されるのは、絵図類に、「狄村」と記されるアイヌである。本州アイヌの存在は弘前藩にて確認されているが、著者は和人との交流・同化の動きを指摘する。また津軽領の人々が松前方面に稼ぎに向く姿を描き、それが主に鮭漁として展開する様子を、近年の研究をふまえて述べている。松前稼ぎは漁民だけでなく、女子の雑業稼ぎも見えて、幕末期には藩の規制を越えて広汎に展開していた、という。ただ、著者が津軽氏の母体を津軽から道南に及ぶ交易活動に想定していることからすると、松前稼ぎは江戸初期あるいはそれ以前からあったと思われる。また豪商として紹介される金木屋などは織物・呉服を商っていて、松前稼ぎとの関連をうかがわせる叙述はない。幕末以前の松前稼ぎは致富には不向きなのであるうか。この問題は今後解明されていくであろうが、藩士をふくめどのような階層がどのような形態で参加したか（藩政の枠から逸脱があったのか）、知りたいと思う。

幕末の弘前藩政はどう動くのか。西南雄藩以外での、とくに北辺の幕末藩政はどう展開するのか、興味深い。著者は箱館開港前夜（天保期）の飢饉状況や藩境を越えた犯罪集団の暗躍に触れたあと、開港した箱館に配置された幕府・諸藩の陣屋・人員への物質（米穀など日常物質）供給の後方基地として青森湊・弘前領が注目され、青森御用達商人滝屋などが幕府に取り立てられつつ、活躍する様子を述べる。さらに戊辰戦争期の洋式軍制改革や盛岡藩との戦争にふれつつ、領内が戦費負担に喘ぐなか、弘前藩はみずから巨大な資金を出し、青森滝屋など豪商をくみこみ、蝦夷地交易の青森商社を設立し、運営していくことを述べている。

幕府解体という状況下、一方で藩士帰農策をすすめて家禄削減を図り、他方では商社を育成し、藩庫を賄おうとしている。藩政は重心を移しているように見えるが、このなかで明治四年廢藩置県となった。

最後に、津輕家と近衛家の関係について。津輕為信は近衛家の家系に公認され、近世を通じて宗家として仰いだ。戊辰戦争期にも、幕府と薩長の政治的・軍事的対立のなかで、近衛家からの令書を受け弘前藩は勤皇に決した、という。津輕家・弘前藩と近衛家との興味深い関係を示しているが、著者は「序」において津輕家の自己認識の問題として説明している。この自己認識は、近衛家につながる意味は、津輕家にとってどのような問題なのだろうか。国境地帯の大名家ゆえに表面化したかと思われる。本書を読み直すなかで、考えてみたい。

以上、著者の体系的な弘前藩政叙述に対して、それを紹介することなく、私の勝手なノートとなってしまう。また誤解の多いことをおそれ、著者におわびしたい。史料残存の特殊な条件を克服して弘前藩政史の新たな段階を切りひらいたことに敬意を表したい。本書が明快な論述であるだけに、弘前藩の藩政とは何であつたかと考えるよう、刺激されてしまった。このことに改めて感謝したい。

(吉川弘文館、本文二四九頁、系図・年表・参考文献一三頁、

二〇〇四年三月、二八〇〇円)

(やまもと・たかし 筑波大学教授)